

コカナダモ

科名：トチカガミ科
学名：Elodea nuttallii
原産地域：北アメリカ

【どんな被害を引き起こすのか】

生態系：在来植物の駆逐

- ・繁殖力が旺盛であり、大きな群落を形成し、遮光や溶存酸素濃度の低下等により、在来植物や水生生物の減少を招く
- ・アレロパシーによる他の植物の生育阻害

産 業：治水や利水への悪影響

- ・水路等での繁茂や水門等への堆積による通水・機能阻害、船の航行阻害を招く

【生育場所】

- ・湖沼、ため池、河川、水路等
- ・日当りの良い浅い水域を好む

植物体は長さ1mを超えることもある

- ・花期は5～9月
- ・直径3mmの白色の雄花が葉腋の苞鞘の中で形成され、水面に放出された後に浮遊しながら開花

常緑の多年生沈水植物



- ・植物体は冬季も枯れず越冬する
- ・雌雄異株

- ・葉は、基部では対生するが、上部では3輪生
- ・葉身は線形で、長さ5～15mm、幅1～2.5mm
- ・縁に細かい鋸歯がある
- ・ねじれたり反り返ったりすることが多い

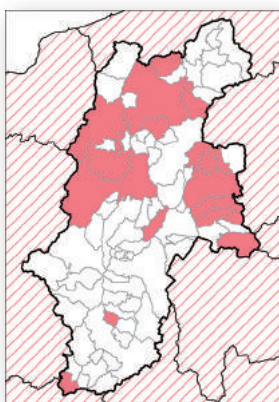
【どこまで広がっているか】

長野県では

- ・全県の湖沼やため池、河川等に野生化

全国では

- ・植物生理学の実験植物として、昭和の初めに持ち込まれたとされるが、正確な年代等は不明
- ・1961年に琵琶湖の北湖で野生化が確認
- ・琵琶湖のアユ種苗とともに広がったといわれている
- ・現在は、北海道～九州に野生化



2019年現在
■ 定着 ■ 一部地域に定着

世界の分布

- ・ヨーロッパ、東アジア（温帯域）

【特性】

- ・日本で野生化しているのは雄株のみで、種子生産はしない
- ・水質汚濁の進行した水域のほか、湧水のある清水域への侵入も目立ち、幅広い水質環境に生育する
- ・茎葉の切片（切れ藻）での栄養繁殖が可能
- ・耐寒性があり、冬季もそのまま越冬し、在来種よりも早く成長し繁殖する

【間違わないで！】 主な類似植物

クロモ（トチカガミ科）（在来種）



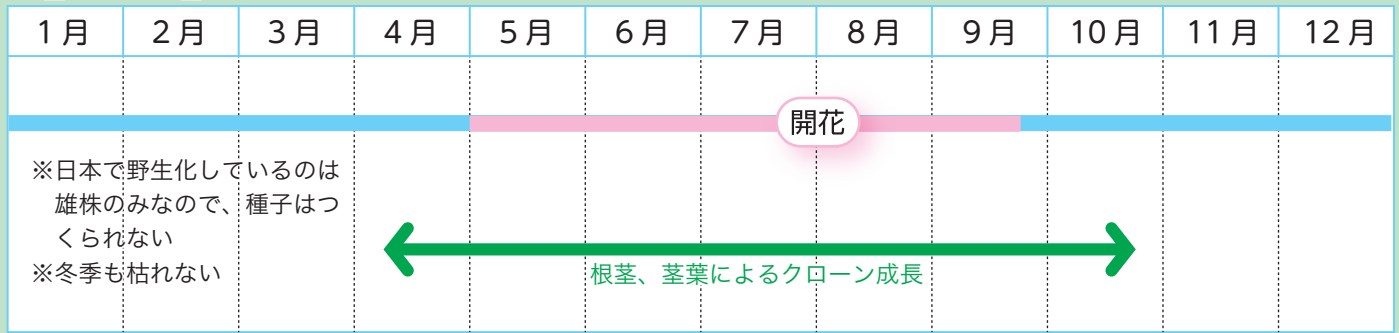
- ・多年生の沈水植物
- ・茎はよく分枝し、各節に3～8枚の葉が輪生する
- ・葉は長さ1.5～4cm、幅2～4.5mm、縁には目立つ鋸歯がある
- ・冬は越冬芽を形成し、植物体は枯れる

オオカナダモ（トチカガミ科）（外来種）※P.49参照



- ・南アメリカ原産
- ・常緑の多年生沈水植物
- ・全長1mを超え、茎は盛んに分枝する
- ・葉は茎に3～5輪生（4輪生が多い）し、長さ1.5～4cm、幅2～4.5mm、縁に細かい鋸歯がある

【生活史】



【防除方法】

流出口・流入口へのネット設置 出さない・入れない

- 対象地に既に繁茂している場合、下流に植物体（切れ藻）が流下しないよう（拡散しないよう）な配慮が必要
- 対象地に生育していなくても、連続する水系の上流側に生育する場合は侵入を防ぐことも必要
- 排水溝や流入口等に目の細かいネット（目合5～10mm程度）を設置し、切れ藻の拡散と侵入を抑制する
- 対象地やその上流側等に生育していない場合は、定期的にコカナダモの有無を監視し、早期発見に努める

抜き取り 抑える・根絶を目指す

- 手作業により根から抜き取る（できるだけ根や茎を残さないように！）
 - 作業により、切れ藻が発生するため、下流へ流出しないよう注意
 - 実施時期は、地上部が成長する時期（地下部の栄養が少なくなる6～8月）を中心にいつでも可
 - 年1回以上、見られなくなるまで継続して実施する
- ※抜き取り作業では、根と植物体との間が切れやすく、根こそぎ取ることが難しい

<愛知県矢作川の事例*>

コンプレッサーにより水中の根の部分に空気を吹き付けて、根を固着物からはがして引き抜き作業を行うことで、切れ藻の発生を抑え、労力を低減化する等の効率化をはかっている

※矢作川研究 No.18 (2014年)

きっちりと駆除し処分する ～作業中・作業後～

- 駆除作業にあたっては、抜き取り実施者のほかに、流下する切れ藻をすくいとるタモ網等をもった人員の配置、また作業場所下流側にネットを張る等の措置が望まれる
- 乾燥に弱いため、抜き取ったコカナダモを陸揚げして、しっかりと乾燥させて枯死させる
- 十分に枯死させていない場合は、根や茎等が飛び散らないよう密閉できるゴミ袋等に入れる
- それぞれの自治体のごみ処理方法に従って処理する
- 長靴等に付着したコカナダモを作業域外に持ち出さないよう注意が必要

